みなさん、こんにちは。久留米大学附設中学校・高等学校へのご入学おめでとうございます。保護者の皆様も、大変お悦びと存じます。心よりお祝いを申し上げたいと存じます。

みなさんのご入学は、また、みなさんを久留米大学という大きな集団にお迎えするということでもありますので、学校法人久留米大学、大学、並びに、附設高校同窓会、附設中学・高校後援会の役員の方々が、来賓として、お祝いに来られております。ご来賓の皆様には、お忙しい中を、新入生のために、ご来校いただき、大変ありがとうございました。なお、神代正道理事長、永田見生学長、長谷川房生同窓会長、藤崎敬介後援会長の方々からは、後ほど、お祝いの御言葉をいただくことになっております。

この場におられる多くの方々は、正面に校舎西棟の階段塔をご覧になりながら校門からの坂道を歩いて来られたと思います。この校舎は、この春、みなさんをお迎えできるように、建て替えてきたものですが、昨年の秋に完成しました。かつての校舎の面影がこの階段塔にほんのりと残されておりますが、新しい仕掛けもあって、縦横の比例が「黄金分割比」になるような長方形が、正面の壁に、窓やタイルの組み合わせで、何箇所かあるはずです。興味があれば、探してみてください。また、東棟中庭には、平行線が歪んで見えるようなタイル配置があることは、入学試験のときなどにすでにお気づきだと思います。校舎自体がみなさんに何がしかを語り掛けるような、そういう学校で新入生のみなさんは学ばれることになります。そうそう、あちこちに大きな鏡もあります。これは、身だしなみに気を遣って学校生活をおくってください、というメッセージでもあります。

さて、校長から、改めて、新入生のみなさんに、学校を代表して、みなさんに寄せる期待の大きさをお伝えしたいと思います。最初に、この学校の歴史と目標について簡単に申し上げましょう。次に、今日の時代に添う形の補い、わたくしなりのものですが、それを説明した上で、附設生としてのみなさんへの期待を改めて申し述べて、式辞を終えたいと考えています。

まず、昭和二五年、西暦では一九五〇年、つまり、今から六三年前に、久留米大学附設高等学校は創立されました。初代校長の板垣政参先生は、岩手県のご出身です。終生、篤実なクリスチャンとして過ごされました。詳しいことは省きますが、一九世紀後半から二〇世紀半ばまでの一世紀にわたる近代日本の歴史の浮き沈みの激しさというべきものを一身に負っておられたと言ってもよろしいかと思います。附設草創の頃の様子は、わずか六〇年余り昔と言いながら、時代も人も遠くなり、もはや伝説のかなたに霞んでいる感じがありますが、面影は、西棟の思考回廊に映されています。そして、創設のときの意気込みは、今も、校歌の歌詞を通して、生徒のみなさんにしっかりと伝わっています。

そして、附設高校に中学ができたのは、昭和四四年、西暦一九六九年です。このときの校長、原巳冬先生は、禅に造詣の深い方で、特に、道元禅師に傾倒されていたと伺っています。原先生は、附設高校の目指すもの、つまり、建学趣旨は、板垣先生以来、

「国家・社会に貢献しようとする、為他の気概をもった、誠実・努力の人物の育成」

であったし、これからもそうなのだと強調されました。実は、先生は、「為他」という大事な言葉を補われました。この言葉は、道元禅師の『正法眼蔵』という書物にあり、禅の言葉ですから、その中身は大変深いものがあるはずですが、字面だけを見ても、他の為、他に為す、その際にあるべき己の姿勢など、いろいろと考えさせられます。原先生が中学生を含めた少年たちに期待されたのは、「為他」という言葉によって、生きるということの意味に思いを馳せてほしい、ということだったと思います。生きるということは、自分だけでは成り立たない、他人との関わり、それも、他人への奉仕あるいは貢献という想いがあって、初めて自分がこの世にあるということに価値が出て来るのだ、というようなことを示唆されたのではないでしょうか。

附設高校が女子生徒を受け入れるようになってから九年目、そして、この春からは、附設中学にも女子生徒が入りました。女と男は、身体の構造も違いますし、ホルモンの働きも異なりますが、人間としての価値には差異はありません。個人生活、感情生活の面では、生物としての具体的な要素がものを言うので、男か女かは問題になります。しかし、社会生活、特に、組織の場が大きければ大きいほど、人間は、人格、素養、技能といった抽象度の高い要素で支配されます。教育の場では、男女差に配慮した細やかな取り扱いは欠かせませんが、この附設中学・高校が産み出そうとする「国家・社会に貢献しようとする、為他の気概をもった、誠実・努力の人物」は、まさに、人であって、男も女もありません。しかしながら、大事なお子様をお預かりするにあたって、保護者のみなさまに、わたくしどもから、学校現場での人と人との距離感が女か男かの違いを尊重しなければならないものであることを十分に承知し、注意の行き届いた教育にあたりますと申し上げます。

さて、先ほどから、附設中学・高校の目指すものとして、「国家・社会に貢献しようとする人物」に触れてきましたが、最近、あちこちで「グローバル人材」というのが話題になります。附設の新入生ですから、みなさんも「グローバル人材」という言葉は知っているでしょう。しかし、あれは国家も社会もないのではないか、とか、大人の世界の話で自分たちには関係がない、と思っているかも知れません。

「グローバル人材」を巡る日本での一般的な理解は、大体、次のようになっていると思います：

特に、経済関係で世界は一体化していて、企業活動が国境を越えて展開される
ことは当たり前である。日本の企業も例外ではなく、企業活動の担い手、つまり、

人ですが、かれらは、国の枠を超えて活躍できなければならない
というわけで、
国の枠を超えて活躍できる人間、「グローバル人材」が、これからの日本では
要るぞ。「グローバル人材」を養成しろ。…
という筋書きになっています（例えば、経団連「グローバル人材の育成に向けた提言」―ネット検索してください）。

こんな話を始めますと、中学・高校の入学式なのにこの校長は何を言うのかと、みなさんは、まず、思うでしょう。そして、**そうか、附設のレベルの学校なら「グローバル人材」を目指せと言いたいのだな、**と予想を立てたと思います。**しかし、違います。**今、ご紹介した、一般的な理解の、さらに、その裏には、ある**「思い込み」**があって、それが間違っていると、わたくしは考えています。高校入学生の皆さんには、『附設高校生になるために』というパンフレットの巻頭言で長々と書きましたので、それを改めて読んでいただけるとありがたいと思います。

裏にある「思い込み」とは何でしょうか。**それは、「世界」と「日本」とは違い、対立するものであり、「日本人」は「日本の中」にだけ関心を注いで頑張ることが基本だとされていることです。**これは「思い込み」というより、**「思い間違い」**と言うべきなのですが、非常に根深くて、最近でも、「鎖国」とか「開国」という言葉が新聞紙面などに踊ることがあります。しかし、「世界」とは何か、と考え直してみましょう。「世界」は、現在、この地球上にある、地理的、社会的、あるいは文化的なものの全体として成り立っているものです。**当然、「日本」は、その「一部分」でしかありません。しかも、「日本」が「世界」の「一部分」であると意識することは、同時に、「世界」が実に多様な「部分」の集まりであることに気付くことでもあります。「世界」と「日本」は対立のしようがないのです。**

みなさんによくよく知っておいてほしいことは、**みなさんは、新しい世界を作っていくことに世界の他の「部分」の人たちと一緒に貢献することになるということです。**みなさんは、世界の一部分に根差しているのですから、このことは、いやもおうもありません。具体的な貢献の形については、考えてみなければならない点がありますが、いずれにせよ、意味のある貢献を果たしたいものです。みなさんでなければできないことでなければならないでしょう。**そういう貢献は、それぞれの多様性をもとにして、初めて成り立つものです。**みなさんの多様性の根源はどこにあるでしょうか。それが、まさに、「日本」の文化や歴史なのです。世界の他の「部分」の人たちもそれぞれの文化や歴史を背負って世界を作ります。ですから、なによりも、まず、みなさんの帰属している世界の「部分」をよく知らない限り、新しい世界を作って行くことに貢献できません。つまり、自分自身をよく知ることです。そして、他の「部分」にも関心を拡げ、知ることですが、わたくしの感覚としては、

思い入れはしない、淡々と知る、そういうものだとして見る、という姿勢がとれるのが望ましいように考えます。要するに、自分が育ち、学んだ国の文化や歴史を自分の多様性の基本において、その上に、地域性や歴史性が反映しない技能や知識を身に付けていれば、世界のどこでも、また、世界史の文脈でも、どんなにささやかであっても、意味のある仕事ができるはずだということを、みなさんに知っておいてほしいと思います。

建学趣旨で言う「国家・社会への貢献」とは、板垣先生や原先生は、日本と日本の社会への貢献を指していたと思います。日本が世界の一部分であることは、その頃も変わらなかったはずではありますが、当時の交通や通信の水準を考えると、日本と世界とを分けて考える方が自然だったかも知れません。今は、交通も通信もほぼ瞬時に世界中を回ると言える時代ですから、日本が世界の一部分ということには実質的な意味があります。しかし、同時に、このことは日本や日本社会への貢献が、そのまま、世界という文脈の中で意義を持つことを示します。みなさんの中には、今後、世界中を動き回って仕事をする人も出るでしょうし、あるいは、ごく狭い地域に留まって日常業務を淡々とこなす仕事に従事する人も出ると思います。しかし、どちらであっても、新しい世界の構築に貢献することになります。狭い地域に仕事の場を限ったとしても、実は、その成果は、世界史の文脈に載るのだ、「すぐれた仕事」は、いつ、どこで、評価を受けても「すぐれた仕事」でなければならないのだ、という意識を養ってほしいと思います。

ここまで、建学趣旨の今日的な意味を解説いたしました。要約しましょう。

大事な言葉は、「為他」であって、これには、人が生きるとはどういうことか、
という問いへの示唆があります。そして、この「為他」をキーワードとしながら、
附設中学・高校における学びを通して培った日本の文化・歴史に根差した
素養を多様性のもととして、日本は世界の一部分であるという認識の下で、
みなさんが、他の文化・歴史で育った人たちと一緒になって、
新しい世界を作り上げていくことに貢献してください。期待しています。

と、こういうことになりましょう。

式辞は以上です。長い上に、大変わかりにくい話だったろうと思いますが、よく聞いていただきました。本当にありがとうございました。

平成二五年四月八日

久留米大学附設中学校・附設高等学校

吉　川　　敦